

平成 25 年度 福島県男女共生センター公募型研究事業
Research Commissioned by Fukushima Gender Equality Center
Recherche subventionnée par le Centre pour l'égalité entre les hommes
et femmes de Fukushima

**「復興に向けた地域コーディネーターのコミュニティ
づくり—男女共同参画社会実現の視点から」**

Creating Local Organizer Community Towards Gender Equal
Reconstruction

Création d'une communauté d'organiseurs et organisatrices locaux pour
la reconstruction : le point de vue de la réalisation de l'égalité entre les
hommes et femmes

報告書 概要版

Report Summary
Extrait du rapport

平成 26 年 3 月

「復興に向けた地域コーディネーターのコミュニティづくり—男女共同参
画社会実現の視点から」研究チーム（研究代表者 村田晶子）

目次／Contents／Table des matières

<日本語版>

1. 報告書概要

2. 実践記録

(1) “福島から、フクシマへ”

—震災と原発事故による心の変化を当事者として振り返る—

青柳千秋

(2) 福島県男女共生センターにおける実践から考えること

水野史恵

(3) 平成 25 年度実践記録タイトル・執筆者一覧

<ENGLISH VERSION>

1. Report Summary

2. Communication report

(1) From Fukushima to FUKUSHIMA: from a local Fukushima to a global FUKUSHIMA

Thinking back and understanding how my feeling changed about the earthquake and the catastrophe

Chiaki AOYAGI

(2) Thinking about Fukushima Gender Equality Center practices

Fumie MIZUNO

<VERSION FRANCAISE>

1. Résumé du rapport

2. Retranscription de l'exposé

(1) Du Fukushima à FUKUSHIMA : d'un Fukushima local à un FUKUSHIMA global

Introspection pour comprendre l'évolution de les sentiments par rapport au séisme et à l'accident nucléaire

Chiaki AOYAGI

(2) Réflexion sur les pratiques du Centre pour l'égalité entre les hommes et les femmes de

Fukushima

Fumie MIZUNO

<日本語版>

1. 報告書概要

【研究課題名】

「復興に向けた地域コーディネーターのコミュニティづくり—男女共同参画社会実現の視点から—」

【実施期間】

2012年10月～2014年3月

【研究メンバー】

名前	所属	専門分野
村田晶子	早稲田大学	社会教育
中田スウラ	福島大学	社会教育
天野和彦	福島大学	社会教育
小宮ひろみ	福島県立医科大学	医療保健
新井浩子 (2012年度)	早稲田大学	社会教育
吉田和樹 (2013年度)	茨城キリスト教大学	公衆衛生
矢内琴江 (リサーチ・アシスタント)	早稲田大学大学院	ジェンダー論
秋重知子 (研究補助者)	早稲田大学	

【研究目的】

本研究の目的は、東日本大震災後の地域復興に向けた、長期的な展望からの地域コーディネーターの学びあうコミュニティの形成を支える支援体制の構築である。異なる領域の支援者の連携ネットワークが形成されることで、長期にわたる地域復興の担い手として女性たちが活躍できるようになることをめざしている。

地域コーディネーターは、業務やボランティア活動などをおして、復興や地域の発展に取り組んでいる。いま、福島県内の地域コーディネーターは、原発災害により、職場や活動の場だけではなく、日常生活や地域との繋がりを、再編しなければならない状況にある。しかも、福島県の復興には、放射能災害の影響により、今後も長い道のりがかかると言われている。そのため、市民が主体となって声をあげ、長期的な視点にたった復興に参画して行くことが可能にためには、地域コーディネーターたちの活動を支える支援体制を構築していくことが不可欠である。そこで、本研究は、次の三点を軸に進められてきた。

- 1) 震災後の「支援者」の実態の把握
- 2) 女性差別や障害者への差別、ダイバーシティの実現のための拠点としてのセンターの役割の明確化
- 3) 長期的視点に立って支援者が「学びあうコミュニティ」を形成していく体制づくりのシステム開発

なお、本研究は、福島県男女共生センター地域課題調査研究「福島県男女共生センターを中核とする災害復興に向けた女性支援者の力量形成に関する研究」（平成24年7月1日～平成25年2月28日）と連動して行われた。

【研究の背景】

国際的な災害とジェンダー研究は、災害による被害には明白な男女格差があり、女性は男性に比べて人的被害が大きく、復興資源へのアクセスが不利になり、人権侵害にもあいやすく、災害リスクを軽減するための多くの役割を担うにもかかわらず公的組織から排除されることを明らかにしている（注）。わが国でも2004年の新潟県中越地震をきっかけに災害・復興・防災における男女共同参画が本格的に提起されるようになったが、実効性は極めて不十分であることが東日本大震災で明らかになった。とりわけ、震災に加えて東京電力福島第一原発事故により広域的・複合的な被災を受けた福島県においては、生活基盤の直接被害のみならず、復旧の遅れ、家族の離散、生涯にわたる健康—とりわけ妊娠・出産・育児への不安、差別など多様な課題に女性達が直面している。このような問題を解決する道筋には、女性も男性も正確な事実認識に基づき声をあげ、復興の主体として参画していくことが必要不可欠であり、それを可能にする長期的組織的支援体制の整備と、支援者の養成および研修が必要である。

【研究の方法】

本研究では、実践の現場と当事者たち自身の省察を軸にした実践研究という方法をとった。これにより、復興支援の現場で活動する、または業務を行う支援者自身が、現場でつちかってきた知見や経験を明らかにしていくことを通して、現場における課題を解決し、実践の新たな展開を生み出すための知の創出をめざした。さらに、福島県が現在置かれた状況を考慮しながら、個人だけではなく、複数の人たちとの省察の場を組織することで、支援者自身のネットワークの構築をめざした。そのために、本研究は、主に次の四つの実践に、福島県男女共生センターや、いわき市男女共同参画センターと協力しながら、取り組んだ。

①ヒアリング調査の実施

福島県男女共生センターや、県内の男女共同参画センターの職員や、自治体職員に、

それぞれの機関での取組みや、職員の研修システムの状況を把握するために、ヒアリング調査を実施した。

②ラウンドテーブル

ひとつの研修方法で、報告者と聞き手によって少人数でグループを組み、丁寧に時間をかけて、実践を報告し、話し合い、聴き合い、記録を作る方法である。報告者にとって、報告に際して記録をつくる行為は、実践の中での省察を踏まえて次のレベルでの省察の機会になる。異なる領域で活動する人への語りは、経験知・暗黙知を可視化する機会になり、報告の中で、報告に対する応答の中で、自分自身による実践の省察が重ねられる。また、聴き手は、報告の物語を聞き取り、話し手の文脈に沿いながら、話し手が安心して語れる関係をつくりながら、実践を聞き取っていく。そうした関係をつくり出しながら実践の省察を重ねることがラウンドテーブルの目的である。従来の報告会にありがちな成功実践の報告とヒントの持ち帰りや、実践事例への専門家による批判的な評価というような関係ではなく、現実で直面する課題を浮上させることが可能な方法である。

③実践記録を書く

ラウンドテーブルの実施後に、実践報告者には、実践記録の作成を働きかけた。この実践記録には、報告した実践や、報告後の気づきなどが書かれている。本概要に、二つの実践記録を資料として添付した。

④実践記録の共有

実践記録は、「実践記録集」としてまとめられて、毎回のラウンドテーブルで、参加者に配布した。また、実践記録に書かれたことを共有し、さらに、実践者自身が実践を振り返りを深める機会として、「実践記録を読む会」（2012年5月25日）も実施した。

【成果と課題】

- 本研究を通して明らかになった支援者の実態
 - 支援者にあまり光が当てられていない実態がある。
- 例 「1年半たってラウンドテーブルの機会があってようやく語れた」
- 支援者も自らも被災者であり、家族的責任を負うなかで業務にあたっている実態が浮かび上がった。

- 支援者を支えるネットワークの日ごろからの構築の重要性
- 支援者の実践を支える取組みとしての「ラウンドテーブル」（聴きあう・語りあう、書き、読みあう実践）の可能性
 - 自らの実践をふり返る機会
 - 多様な領域の実践者の結び目
 - 異なる世代の出会いの場 世代継承のサイクルの形成
 - 新しい価値観を創出する機構
- 支援者に必要な思想一向かい合っている現実が必要とされているのは
 - 「生きることを支え合う思想」
 - 「今を生きるために、数万年に耐えうる生きる思想」
 - 「女性差別を許さないという確かな人権思想」
- 支援者自身による復興に向けたコミュニティづくりの記録の作成・蓄積

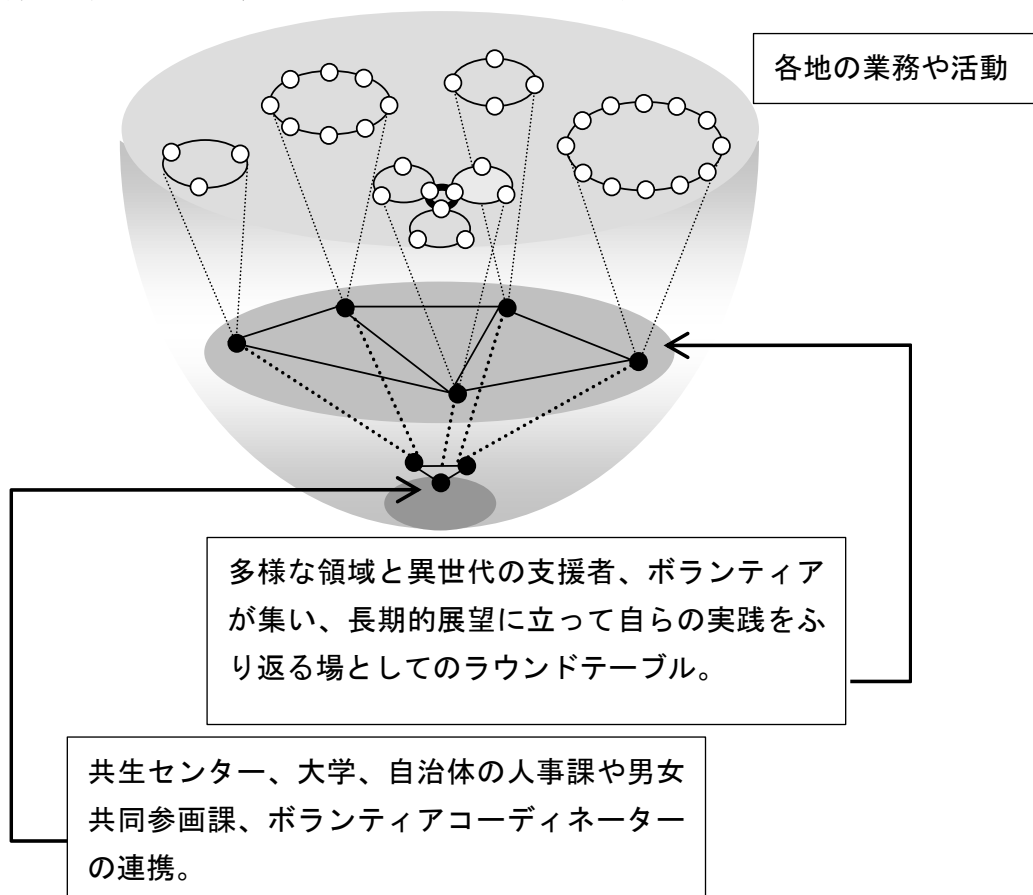
【共生センターに期待される役割】

- 原発被災により顕著になっている女性差別・障害者差別を超えていく思想形成の拠点。
- 男女共同参画推進体制の基軸としての、研修機関としての役割
- 共生センターと自治体の男女共同参画課、大学、他領域の支援者等との連携
- 男女共同参画、人権、防災に関する学習の機会の提供
- ハラスメント防止、相談体制の整備

<ラウンドテーブルと共生センター・関係機関のコミュニティの関係> (イメージ)

日本社会教育学会が提案した「学びあうコミュニティをネットワークで支えるシステム」の図をもとに、本研究事業で提案するラウンドテーブルと共生センター・関係機関のコミュニティの関係を検討すると、支援者を支える支援システムは、以下のように説明できる。

図 <学びあうコミュニティをネットワークで支えるシステム>



(日本社会教育学会編『学びあうコミュニティを培う』東洋館出版、2009年もとに作成)

<3つの層を貫く思想の構築>

- 女性、障がい者差別の克服、男女共同参画社会の実現
- 新たな学習観の地平を拓く
=人と人が豊かな関係を気づきながら学びあう社会の創出

2. 実践記録

“福島から、フクシマへ”

—震災と原発事故による心の変化を当事者として振り返る—

青柳 千秋・NPO 法人 市民メディア・イコール

1. はじめに

福島県の面積は、富山、石川、福井の三県を合わせた程あり、また、人口もその三県を足したものと同等とされています。天気予報では、浜通り、中通り、会津地方とエリア別に予報されますが、気候だけでなく、経済圏や気質など同じ県といえどもかなり違いがあります。

私の住む郡山市は、福島県のほぼ真ん中に位置し、その面積は東京都 23 区と同じくらいです。県庁のある福島市は、県都と呼ばれ、対して郡山市は商都と呼ばれます。そこで、写真撮影の会社を夫と共に 20 数年、また、市民活動に参加してから 10 年が経ちました。

2. 大地震直後から 1 週間

2011 年 3 月 11 日 14 時 46 分。一週間後に車検を控えた車で走行中、ひどくハンドルを取られ、車に異常が起きたのかと思いました。ちょうど赤信号で減速していたので、車はすぐに止まりました。と同時に、これは地震だ！と分かりました。信号機、電柱が大きく揺れ、近くのビルからは女性が出てきて泣き出し、信号は消えました。車の窓を開け、揺れが収まるまでは、動きませんでした。長い時間でした。その間、揺れが収まったあとの行動を考えました。信号は全て消えているだろうから、ゆっくりと車を走らすこと、あせらないこと、事務所に着いたら、スタッフの安否の確認、事務所の状況把握など。その間、ずっと心臓がバクバクし、口から飛び出そうでした。考えることで平静を保とうとしていたのかもしれませんが。数分後、ゆっくりと車を走らせ、事務所に戻ると 1 人残っていたスタッフは、すぐに外に出て、無事でした。裏磐梯に出張撮影で出ている夫ともう 1 人のスタッフとは、連絡が取れません。夕方に、やっとメールが届きました。「多分、出勤になるだろう」それは、災害救助ボランティアの出勤のことでした。メールが届いた＝無事ということの意味していましたので、その部分では、ひと安心でした。普通 1 時間程で帰れるところを、崖崩れのため遠回りのルートを通り、4 時間くらいかかり、9 時くらいに帰宅しました。そこから、約 1 時間かけて準備をし、夫は出かけました。余震が続く中、自宅に一人残りました。少し気持ちが落ち着き、地震後初めて TV をつけました。目に飛び込んできたのは、ニュース映像の大津波。地震の

大きさ、広範囲の被害、ただただ驚くばかりでした。そして、このあとの生活が大きく変化するだろうと感じたことを憶えています。その夜から3、4日間は、すぐに逃げ出せるような服装で横になり、熟睡できなかったことを憶えています。

次の日は、夫の実家に行き、夫の両親の安否確認と、夫の出動を伝え、叔母が避難している公民館に迎えに行き、夫の実家に滞在してもらうようにしました。すでに、コンビニやスーパーから食料品が少なくなっていましたので、食料の確認、次の非常事態の時の連絡方法を決めました。幸い夫の実家は、プロパンガスで、水道電気も既に復旧していました。寒い時期で灯油不足が心配でしたが、電気ストーブやホットカーペットで対応できました。

次に自分の実家に行き、家族の状況を確認。こちらもライフラインは既に復旧しており、心配なのは食料とのもので、缶詰を少し差し入れしました。長兄は、連れ合いを5年前に亡くしており、障害をもつ3人の子どもの世話と両親を抱えています。心臓の薬を毎日飲まなくてはならない長男の定期検診が月1回あり、移動時間1時間の福島県立医大へ通院しなければなりません。ガソリンが手に入るかを心配していました。

3. 次の災害

地震当日と翌日は、地震の心配だけでした。しかし、次第に原発からの放射線漏れの情報が聞こえてきます。「直ちに影響はない」本当でしょうか？

地震発生から3日間は、何かあれば、一人で判断し、行なわなければいけない状況でかなり気を張っていました。余震は頻繁におき、災害支援のヘリコプターの音が昼夜問わず響いていました。その後1ヶ月以上もの間、警察、消防、自衛隊等のヘリコプターが昼夜絶え間なく往来していました。

水が危ない---放射性ヨウ素の拡散が予想される、水道水は飲まないように！友人からメールが届きました。水を買に行くと既に遅く売り切れ。そこで、自販機のお茶やジュースを購入。放射性ヨウ素の半減期は7日。いくつもの鍋に水を貯め、4日目から使用することで対応。半減期の半分で、比較的影響が少ないといわれる年令の自分はこれで良しということにしました。

地震から4日目午前、夫が帰宅。捜索現場の津波の被害は甚大で、余震の中の捜索は、とても危険が伴ったこと、そして、原発からは放射性物質が漏れ出て危険な状況であることを話します。それは、消防と行動を共にしていたため、情報を知らされていたからです。そのために、最初に向かった捜索予定地が原発に近い沿岸部だったため一度引き返し、別な地域に向かったということでした。それから、夫は、次に爆発が起きた時はとても危険なので逃げることになる、その準備をすすめる話しました。2、3日かけ、夫の両親と叔母、私達夫婦の5人分の食料と水を3日分、衣類寝袋を用意。その準備の間、自分の実家、次兄のことが気になり、重い気分で準備をしました。逃げなければならなくなった時、実家の家族を残すことになる、自分は一生後悔するのはないか。それ

は、出来ない。悩んだ末、覚悟を決めました。その時は、郡山に残る、この地で生きていこうと。

4. 行動すること

地震直後から、自分たちの団体の ML や関連の女性団体の ML が活発に発信されていました。TV の報道に気持ちが重くなっても、そこで励まされたり、気持ちの切り替えができたりました。ここで生きていくと決めてから、さらに精神的に楽になり、少しずつ前向きになっていく自分を感じることができました。

活動仲間の支援物資仕分け作業の手伝いをきっかけに、出来ることはしていこう、しかし、精神的な無理はしないと決め、外に出て行くことをはじめます。

「女性支援ネットワークこおりやま＊1」では、シングルマザーの支援をしてる方から、大規模避難所となったビッグパレット内で、女性が大変な状況であると ML で訴え、会では臨時会議を行い、行動を起こすことを決めました。4月中旬には、避難所に女性のためのスペース確保の請願書を郡山市、富岡町、川内村へ提出。ビッグパレット内に女性の声を聞くスペース「ほっとカフェ」を＊1の会員である「女性の自立を応援する会」がオープンさせます。それは、福島県男女共生センターがビッグパレットに設けた女性専用スペースの運営団体に加わることにつながっていきます。避難生活と支援活動が長期間続くと予想され、避難されている女性の声を聞き続けることは大切とは考えていましたが、同時期、次兄のサポートをしなければならない状況になり、私の支援活動は休止となりました。時間的に頑張れば出来ないことではなかったのですが、＜精神的な無理＞になり自分の気持ちが落ちてしまうことが予測されたため、休止を決めました。

また、地震の影響で宙に浮いていた「市民メディア・イコール」の10周年記念講演会と総会についても、動かなければいけない立場でした。上野千鶴子さんに講演を依頼し、スケジュールも確保していました。しかし、ほとんどの公共施設が震災の被害で利用不可になり、当初予定していた施設も使えません。中止という選択もありましたが、ここで開催しなくてどうするの？震災に負けてしまうの？仲間から声があがりました。開催すると決め、場所もなんとか見つかりました。

当時市内では、講演会というと放射能関連か脱原発運動かという状況でした。みんなが、それ以外には目を向けられないような時期に開催をし、しかも、ほぼ満席にすることが出来たのでした。終わって達成感もありましたが、疲労感も大きく、複雑な思いでした。実行委員でもある理事2人が原発事故の影響で県外に避難し、業務の分担できず、少ない人数で準備をしていたためです。

「市民メディア・イコール」の大きなイベントも終わり、「女性の自立を応援する会」の避難者支援の活動がビッグパレット避難所の閉鎖に伴い、仮設住宅地での支援活動と電話相談へとシフトして行きます。再び支援活動へ参加できるかと思いましたが、次兄

の持病が重くなり、引越や障害者の手続き等、再びサポートしなければならない状況になってしまい、私の支援活動は、またも休止になります。

5. できることをしよう

無理せず、できることをしよう、続けることを大事にしようと、2011年の後半からは、時間がとれた時に「白河・水俣展」、「全国シェルターネットシンポジウム」等の講演会に参加して行くようになりました。

2012年2月からは内閣府の「東日本大震災 被災地における女性の悩み・暴力相談事業」に「女性の自立を応援する会」が参加することになり、それに関わることとなります。研修会や専門家の指導を受けての参加は、いろんなことを学び直して新鮮な気持ちになりました。そこから、県外の方と接する機会が増え、福島がフクシマに確実に変化していることを実体験として知ることとなっていきます。ある方は、原発事故直後のニュースの映像が印象に残っていたらしく、「郡山駅に到着して、みんながマスクをしていないことにびっくりした」と話したり、もう一方の方は、わざわざ自家製の野菜を持ってきてくれるとか。スーパーで販売している野菜は、必ず放射線量を測定後、安全を確認してから店頭に並べられます。新聞には、毎日各地の環境放射線量が掲載され、ラジオやTVでも同様です。公園や市の施設には、モニタリングポストが配置され、線量の数値が表示されています。郡山（福島）では普通なこと、他県からは郡山（フクシマ）は特別な状況となっています。

同年6月には、新しい体験をします。それは、独立行政法人国立女性教育会館の男女共同参画推進研修に参加した際に、女性会館連絡協議会の方や前千葉県知事の堂本暁子さんと直接会話が出来たのは、大きな刺激になりました。しかも、相談業務のことで直接お聞きしたいと講演を終えて出てくる堂本さんを廊下で待ち、その機会を得たのです。以前の自分からは、想像できないことです。このことをきっかけに積極的な自分が動き始めました。

6. おわりに

大地震直後の1週間は、精神的にも重く辛い時間でしたが、それに、耐えられたのは、自分で考え、行動したからだと思います。それは、それまで関わった市民活動で学び行動するという実践してきたからでしょう。私が所属する団体が取り組むジェンダー問題や、女性差別、性暴力問題等の解決への道は険しいのですが、続けていくことで変化が起きる。ほんの少しでも結果が出てくる。それが嬉しいし、パワーになります。

大地震後の私の心の変化は、日々の生活を大切にさせ、所属団体事務所の移転実現、活発な活動体制整備へとつながり、大きなプラスになっています。

(2013年1月13日 実践研究東京ラウンドテーブル報告の記録)

報告者プロフィール

福島県郡山市生まれ、郡山在住。

<所属団体>

- ・NPO 法人市民メディア・イコール 副理事長
ジェンダー平等社会の実現を目標に活動をする。
- ・女性の自立を応援する会 会員
(現：NPO 法人ウィメンズスペースふくしま)
女性支援を主目的に活動。現在は、電話相談や子育て女性の支援なども行なう。
- ・女性支援ネットワークこおりやま 団体会員
郡山市内の女性支援活動を行なう団体会員。女性支援のワンストップを目指している任意団体。

福島県男女共生センターにおける実践から考えること

水野 史恵・福島県男女共生センター

1 福島県男女共生センターとは

開館：2001年（平成13年）1月18日

設置者：福島県

運営：財団法人福島県青少年育成・男女共生推進機構（指定管理者）

2 震災後の男女共生センターの取り組み

（1）震災直後

センターのある二本松市は、震度6を観測とのことだったが、センターは大きな被害はなく、利用者も無事だった。それでも交通手段が途絶えていたこと、安全が確認できないことから、その日センターを利用していた方はセンターに宿泊していただくなどの対応をした。

12日には、双葉町の病院関係者の受け入れ要請が県災害対策本部からあり、その日の夜にセンターに避難されてきた。受入れの時にはわからなかったが、後に避難者が被ばくしていたことがわかり、除染が必要となったため、翌日には除染施設が設営され、スクリーニング・除染施設となり、センターは一時閉館、職員は24時間交替で対応を行った。

当時は、放射性物質についての情報があいまいで、今のように細かな線量も知らされていなかったため、ここが安全な場所なのかとても不安だった。加えて、ガソリンや食料の不足もあり、これまでに経験したことのない不安を感じながらの勤務だった。

初めは24時間対応だったスクリーニングもその後少しずつ短縮され、4月1日には電話相談を再開し、4月11日はスクリーニングも終了となり、翌12日にはセンター業務を再開することができた。

（2）震災から1ヶ月後～現在

4月12日以降、センター業務を再開したものの、2011年度は県からの委託事業の大幅に見直しがあり、それに伴う指定管理料も大きく減額され、通常の事業はできなかった。

そのようななか、女性専用スペースの運営支援や、相談事業（電話・面接相談、内職あっせんなど）、「災害」「被災者支援」をテーマとした講座等を実施することとなった。

ア 広報誌「未来館 NEWS」の発行

広報誌「未来館 NEWS」は、当センターの重要な広報ツールとして、男女共同参画の理念をわかりやすく県民に伝えることを目的として発行されてきた（年4回、各12ページ、各6,000部）。

2011年度は、広報誌「未来館 NEWS」についても、県の予算が配置されなかったため、発行するのかもしれないのか、発行する場合、どのような形で発行するのか検討を行った。検討の結果、県からの予算はないが、センターとして伝えたい情報を発信することは必要であると判断し、年3回、各4ページ、各6,000部というような簡素化した形で臨時版として発行することになった。

イ 福島から何を伝えるか

これまで未来館 NEWSには、センター主催事業の報告を主に、県内で男女共同参画に関する活動をされている個人や団体についての情報などを掲載していた。臨時版として発行するに当たり、紙面が限られているなか何を掲載するか、何を伝えればいいのかあれこれと考えた。震災や原発事故がこれからどのように私たちの生活に影響してくるのか大きな不安があるなか、少しずつではあるが復興に向けた動きもあり、それらを男女共同参画の視点から伝えることができればと考えた。

具体的には、センターで実施した震災・災害復興関連の事業についての報告や、県内で被災者支援活動を行っている団体についての紹介記事を掲載した。

2012年度は、県委託事業として発行できることになり、例年に近い形で発行することとした。

また、福島においては、原発事後の影響で県外に避難している方が多くいるため、県外避難者への情報提供に力を入れようと、県外の男女共同参画施設へ送付する部数を増やし、新たに避難者支援団体へ広報誌を送付することとした。そのため、発行部数を6,000部から8,000部へ増やし、ページ数を8ページに減らし発行することとした。

県外へ避難した方は、県内の情報が入りにくく、不安を感じているということもあつたため、掲載記事は、「今の福島を伝える」ことを心がけ、企画した。

特に、福島では母親と子どもは県外へ避難し、父親は県内で生活するというような「母子避難者」も多く、家族と離れて避難先で不安な生活を送る女性たちへ、福島の女性を支援する活動について紹介したいと思い、紹介団体を選定した。

ウ 支援活動をする女性たち取材して、感じたこと

これまで、様々な支援活動を行っている女性たち取材したが、支援する女性自身も被災者であるなか、志を持って活動する女性たちの姿には毎回心打たれた。

取材をしてみて、彼女たちに共通することがあることに気がついた。

福島で支援活動をする団体は、多かれ少なかれメディアからの取材を経験しているが、彼女たちの思うとおりの記事や放送になることは少なく、本当に伝えたいことが伝わらないというジレンマを感じているのである。一部、マスコミ不信に陥っているような方

もいた。

このようなことから、彼女たちの思いを忠実に丁寧に伝えることの難しさを感じ、できるだけ思いに沿うような記事を掲載できるよう配慮している。

3 これから

福島においては、いまだ震災や原発事故の影響があり、復興の歩みも遅々として進んでいない状況である。にもかかわらず、このような福島の状況は県外にはほとんど知られていないようだ。

今回の報告においては、「福島の人のお話を初めて聞いた」との意見があったり、また、原発事故による福島の特殊事情についても知ってもらったりすることができた。

福島の復興の歩みはこれから先何十年も続くとても長いものになることから、そのときどきの「福島」について、県内外に発信していくことはとても重要であると思う。

福島から何をどのように伝えていくのか、これからも考えていきたい。

(2013年1月13日 実践研究東京ラウンドテーブル報告の記録)

(3) 平成 25 年度 実践記録 タイトル・執筆者一覧

タイトル	執筆者	所属
ジェンダーの視点から生まれた 30 人の声 ～ふくしまの女性たちの 3.11 を記録して～	遠藤 恵	市民メディア・イコール
震災関連事業を通して感じたこと、考えたこと	武藤 朋美	福島県男女共生センター
水道の災害復旧作業に当たるなかで感じたこと	愛川 邦彦	いわき市社会福祉施設事業団 元いわき市水道局次長兼総務課長
震災時の消防活動について	橋本修身	小名浜共同防災協議会 元いわき市消防本部予防課長
NPO 法人ザ・ピープルにおける支援活動について	甘南備 かほる	NPO 法人ザ・ピープル事務局長
東日本大震災における認知症高齢者の対応について (要介護者専用臨時福祉避難所の開設と運営)	野口 富士子	常磐・遠野地域包括支援センター
3. 1 1、あのとときの医療現場 看護師の活動を通して	鈴木 祐子	福島県立医科大学大学院医学科学研究科 精神科認定看護師
福島大学人間発達文化学類子ども支援プロジェクトの活動報告	根本 真理	福島大学人間発達文化学類 4 年
福島大学人間発達文化学類子ども支援プロジェクト～活動から見えてきたこと～	鈴木 美和子	福島大学人間発達文化学類 4 年
震災三年目における福島の「外」からの関わりかた Shirakawa Week 2013 の活動を通して	遠藤 健	早稲田大学 4 年
震災後の出会いと私の活動	班目 康平	NPO 法人しらかわ市民活動支援会 Shirakawa Week 実行委員会
8 月 31 日福島復興支援ラウンドテーブル記録	鈴木 祐子	福島県立医科大学大学院医学研究科
11 月 3 日ラウンドテーブルに参加して	北村 育美	おだがいさまセンター

< ENGLISH VERSION >

1. Report Summary

Research Commissioned by Fukushima Gender Equality Center

Research Title:

Creating Local Organizer Community Towards Gender Equal Reconstruction

Project Duration:

2012 October-2014 March

Research Constituents:

Name	University	Research Field
MURATA Akiko	Waseda University	Study of adult and community education
NAKATA Sura	Fukushima University	Study of adult and community education
AMANO Kazuhiko	Fukushima University	Study of adult and community education
KOMIYA Hiromi	Fukushima Medical University	Gynecology
ARAI Hiroko (membre en 2012)	Waseda University	Éducation communautaire et pour adultes
YOSHIDA Kazuki (membre en 2013)	Ibaraki Chretien University	Public health
YAUCHI Kotoe (Research assistant)	Waseda University	Gender Studies
AKISHIGE Tomoko (Staff)	Waseda University	

Research Objectives:

The end objective of this research is to develop an institutional system that would support creating of a *collective reflective community (Manabiau Community¹)*, which

¹ It is a community of practice in the professional work environment or in the local community. This community is based not only on an individual, but collective reflexive practice. It is a matter of sharing the knowledges and in the dialogue of people in practice. The adult and community education in Japan

consists of local organizers, from a long-term perspective for local reconstruction that responds to the disaster dated March 2011 in the Fukushima prefecture. The research concerns itself with local organizers, who are professionally or voluntarily committed to supporting local reconstruction and development. The people at concern are confronted with the need to reorganize their social, community and daily life in personal and/or public capacities, after the nuclear accident at the Fukushima Daiichi Nuclear Power Plant. It is thus essential to develop an institutional system that would support actions, that are run by local actors in order to ensure that people of the Fukushima prefecture would have a voice in the reconstruction processes, especially given the long term scope of reconstruction. Our research therefore establishes itself around the following three axes:

- 1) To identify the limits and strengths of ways in which local organizers make professional decisions or spontaneously act and communicate.
- 2) To clarify the roles of Fukushima Gender Equality Center, as a platform that would offer services based on the principles of gender equality and the promotion of diversity.
- 3) To develop a system that would facilitate alliance between universities and institutions that support local organizations.

General Context:

According to various international studies related to disaster and gender, inequalities between men and women surface in disaster situations: for example, higher number of women compared to men are subjected to becoming disaster victims; unequal access to reconstruction resources; under-representation of women in positions of power and women's subsidiary roles in decision-making in the reconstruction process and within disaster management structure.

In Japan, the earthquake in Niigata in 2006 was the last disaster before March 2011, at

allowed to create in the fur with measure of its practices and its researches such a community in various local communities; it organized large-scale networks to establish the local autonomy which contributes to the creation of a greater well-being of the society. Today, the development of such a community and the network formed by these communities are essential to build a society of the knowledge, but more urgent still in the Japanese society after the disasters of March, 2011.

which time, the principle of gender equality was reflected in the reconstruction process as well as disaster management. However, the earthquake in March 2011 brought to light a more serious need regarding gender equality. In the Fukushima prefecture in particular, the disaster caused by the failing nuclear power plant threatens the region in more wide spread and complex manners. The catastrophe not only affects the central aspects of people's lives, but also has caused delays in reconstructing infrastructure and buildings in evacuation destinations. It has also caused family separations and health issues. In particular, health effects weigh heavily on women, as the nuclear situation triggered anxiety among women towards pregnancy, childbirth, and children's health. Furthermore, discrimination against women in Fukushima has been observed among people who fear and discriminate against possible birth defects. Therefore, human rights are at stake with regard to problems observed in Fukushima.

In order to deal with these realities and problems associated with them in Fukushima, it is essential that women have an equal voice as an active agent in identifying situations at stake and in their role as a participant in the reconstruction process.

Methodology:

The research methodology adopts participative research-action, which joins in the course of the praxeology which insists on the importance of the reflexivity. By realizing knowledge as part of action and formulating actionable knowledge, we wanted to see what field practitioners would come up with in the hope to help improve their actions. The research also aims at developing a community of “practice collective reflective” based on the particular context of Fukushima. The implementation of this research involves four constituents of “practices collective reflective” including institutions, such as the Fukushima Gender Equality Center and the Iwaki Gender Equality Center.

- **Interviews**

Interviews with people in charge of the Center and its affiliated institutions were conducted with no leading questions. The aims of the interviews are to grasp the realities of the educational system provided to staffs.

- **Round Tables**

The round tables are intended to contribute to a professional development training method. The training is offered to a group of five or six people. It begins by giving one

person an opportunity to express one's reflections about his or her actions. Every participant then takes turn in telling one's own experiences. The training provides interventions to the participants, by facilitating a process by which the participants could further clarify their values and thoughts about their practice. The round tables that we organized brought together constituents, such as local organizers and workers in the field of the public health, public administrators, nurses, teachers, care providers working with women, and students who participated as volunteers in reconstruction related activities.

- **Writing**

We encouraged people who spoke at the round tables to write a paper about communication that they held at the round table and any post-round table reflections. Enclosed in the appendices are two sample papers so as to present a summary.

- **Sharing of Papers**

The papers were compiled as a collection and distributed to all participants in the next round table. We also organized a meeting for reading these papers.

Contribution brought to by the research:

- **Realities concerning local organizers were identified.**
 - Realities that confront people who are involved in reconstruction efforts were not recognized, as our hearings reveal:
 - "After one and a half year, I was finally able to tell my actual experiences at this round table" (a participant).
 - "I have never waited for the help for the workers in public institutions, while I always felt it was necessary " (a participant).
 - Realities concerning local organizers who are themselves disaster survivors, who were taking on new responsibilities in their private or professional capacities.
 - Essential need to organize a network that supports local organizers.

- **Round tables: “listen-tell practice” on the level of interpersonal relations, writing, and paper sharing.**
 - The round tables provided and facilitated a self-reflection process for the benefit of practitioners in reconstruction efforts.
 - They forged links between practitioners of various fields.
 - They created a space for multiple generations to come together, and developed a cyclic channel that channels intergenerational transmissions.
 - They contributed to establishing an organization that would promote new values, styles and sensibilities.

- **Fundamental ideas concerning realities that confront practitioners in the reconstruction process were illuminated.**
 - The idea of providing mutual aid for living.
 - Long-lived and sustainable idea focused on living “here” and “now.”
 - Human rights values that would not tolerate discriminations against women.

- **Documentation and collection of knowledge as accumulated through the exercises of reconstruction activities.**

Expected Roles of the Center:

The essential role, which we expect of the Center, is to establish values that would eliminate and overcome discriminations against women as well as people who are differently abled as a result of radiation.

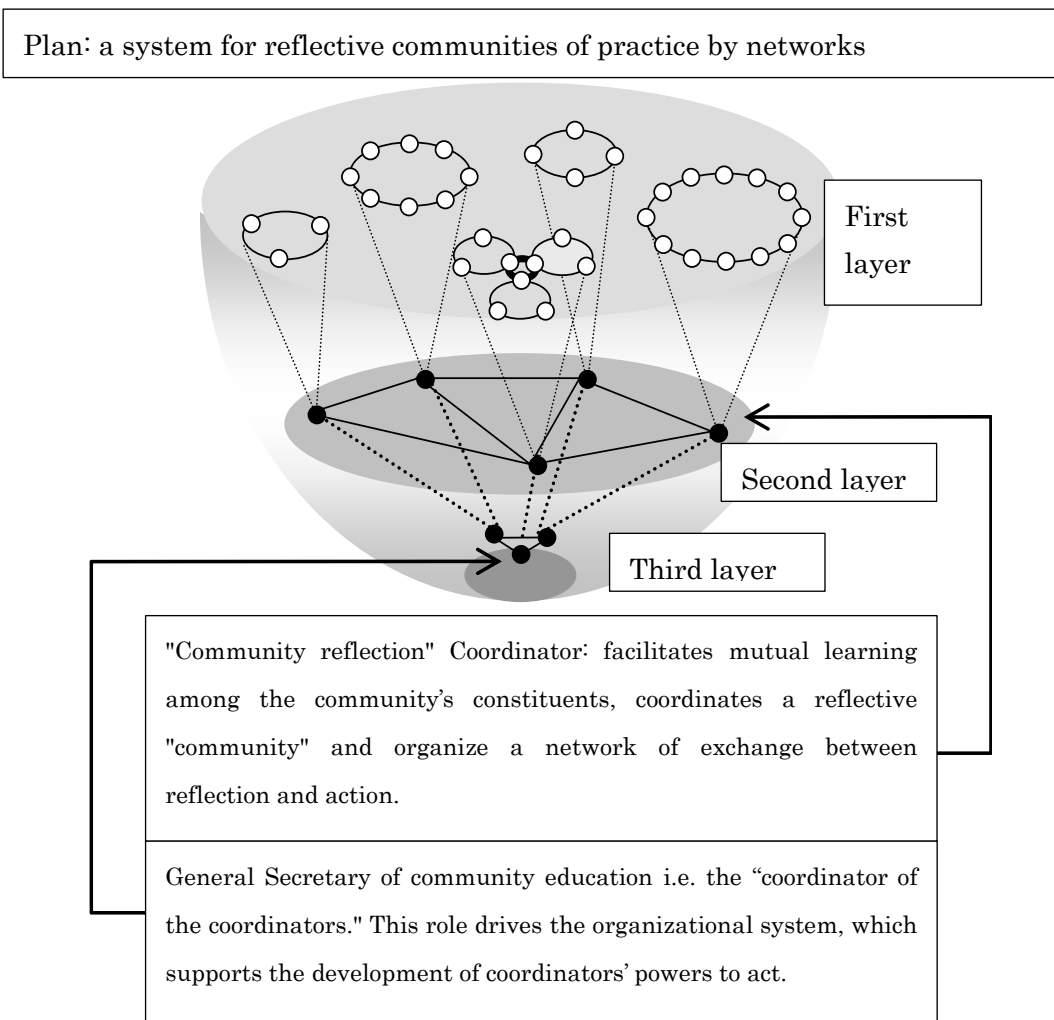
Additional possibilities / responsibilities of the Center:

- The Center can play an educational role as a central institution, which provides education concerning the politics of equality with respect to men and women, and accordingly offer trainings to local organizers and government services workers.
- The Center can organize and develop alliance between institutions that are concerned with the politics of gender equality, involving universities and local organizers.

- The Center can educate people, who would go on to promote gender equality, and would implement human rights values in disaster management.
- The Center can develop gender based harassment prevention services and consultation services for harassment victims.

Conclusion:

As a result of implementing a research based on the described four pillars of practices, we can present a vision concerning the relationship between the Round Ttable, Fukushima Gender Equality Center and affiliated institutions, according to the following plan (The original of this plan is presented in *To develop a collective reflective community* by The Japan Society for the Study of Adult and Community Education) :



The first layer: activities in the community or at work.

The second layer: round tables as space where practitioners of various generations in diverse fields meet and reflect on their actions towards long-term visions.

The third layer: alliance of Fukushima Gender Equality Center, universities, institutions, and volunteer coordinators.

Finally, we insist on the importance of elaborating coherent ideas about all layers:

- To eliminate discrimination against women and differently abled people.
- To realize a society where gender equality is effect.
- To pioneer an education vision for creating a reflective society that is aware of interpersonal and fertile relations.

Translated by Kotoe YAUCHI

2. Communication report

From Fukushima to FUKUSHIMA : from a local Fukushima to a global FUKUSHIMA¹ **Thinking back and understanding how my feeling changed about the earthquake and the catastrophe**

Mrs Chiaki AOYAGI,
member of the community newspaper *Equal* (non profit making organization)

1. Introduction

Fukushima prefecture total surface area is equivalent to the surface area of three Japanese prefectures, Toyama, Ishikawa and Fukui. Also, the population of those three prefectures is equal to the total population of Fukushima prefecture. When watching to the weather forecast, the three areas in Fukushima prefecture are called by their local names: Hamadôri, Chûdôri and Aizu. The three division of the regional areas that leads to difference in not only the weather, but also for their economic activities, and the inhabitant's characters.

I live in Koriyama city, which is located near Fukushima prefecture center, with the surface area of more or less equal to Tokyo 23 wards 'one (2188 km²). Considering the prefectural administration, the town Fukushima is considered as the sub prefecture, but Koriyama is viewed as the principal city. I have been working in Koriyama for 20 years with my husband in our photography studio. I have also been involved in community centers for at least a decade.

2. One week after the earthquake March 11, 2011

March 11th 2011 (14:46) – A week after the earthquake incident, I was driving my car for a repair at a garage and thinking back to March 11. There, by handling my wheel which was hard to move, I realized that my car endure damages. On March 11, just before the earthquake happens, I was driving and the traffic light turning red, so I braked and the car stopped immediately. At that point, I thought “Wow! Earthquake!” The light pole and the electrical posts were shaking a lot, when crying women ran out the building near me, and the traffic light turned off. I opened my window, and I stayed still and motionless until the earthquake ended. It was long. While waiting, I thought about what I would have to do after the earthquake: “Since all the lights turned off, I

will drive very slowly, without rushing, to go back to the photography studio, and check if all the staffs are ok, and also see how the building is". During all that time, my heart was beating so wildly that I felt it would explode. While thinking, I tried to calm myself down. After a few minutes, I drove very slowly to return to the studio, where only one employee stayed. I saw him running out the studio, he was safe. I could not reach my husband and another employee, who went to Urabandai for a business trip. I eventually was able to receive an email from him later that evening, saying that the town would be rescued by some emergency services. Then my cell phone email was delivered: that means that my husband and the employee are safe. I was at least relieved for a moment. I had to take many diversions due to the damaged road and it took 4 hours to get back home, which normally I take only an hour. I arrived home about 9PM. My husband was there, and he went off to join the rescue teams, after getting ready in one hour. I felt a bit eased, and I switch on the TV, that I have not been watching since the earthquake happened. I just took right in the face the images of Tsunami damage. The earthquake magnitude, the disaster, all the damaged area: I was astonished. I kept reminding myself that our life would not be the same after that event. Few days after March 11, the reminder kept me up and I could not fell asleep, lying down on a sofa with all my clothes on, keeping mind that we may need to evacuate the house anytime. The day after the earthquake, I went to my husband's parents' house to check if they were alright, and I told them that their son was fine and went to help the rescue teams. Later, I went to the community center which temporarily became an evacuation center to pick up my husband's aunt and drove her to our parents' house. I saw that the 24 hours convenience store and the supermarkets were empty, so I decided to buy some food and contemplate how I can reach out to my relatives in case of another disaster occurrence. At the parents' home, thankfully we had some bottled gas, and water and electricity were running again. Since the weather was cold during March, I was worried about the heating oil supply, but we can still use electricity for heater and heated carpet.

After that, I went to my parents' house, to check if they were ok. Main electrical devices and equipment at their house were working again. As they were worried about food supply, I gave them some canned food. His son, a single father whose wife passed away five years ago, is living at my parent's home with his three children. He had to take some medicine for his heart condition, and he had to go once a month to Fukushima's hospital to renew his medical prescription, so he was worried about the gasoline for the car.

3. Next disaster

On March 11th, we only thought about the earthquake. After watching the news, we learned that radioactive pollution risk was at stake. “There is no immediate biohazard” told the TV: how true is this? Three days after the earthquake, I was much stressed and was trying to assess what we were supposed to do in such a crisis situation. Following seismic tremors often occurred and we can hear the rescue helicopters flying during the afternoon. During the month following the earthquake, the firemen, the policemen, and the rescue teams with helicopters ceaselessly went and go in the surroundings. Then I got some information telling that the water was polluted by radioactive particles. “Drinking water got dangerous, don’t drink anymore tap water!” this was an email of a friend of mine. It was too late when I wanted to buy some bottled water, shops weren’t selling them anymore. I just bought some water and tea bottled sold in vending machine. “The time to radioactive particles to decay is 7 days”. By collecting water in many pans, I told myself that I can use it after having wait 4 days. I thought it was ok and that there was no risk after the radioactive half-life ends. Four days after the earthquake, on evening, my husband went back home. There are heavy damages due to the tsunami, and even if seismic tremors occur, rescue teams are keeping investigating for casualty and victims. My husband could get some information while helping the firemen: people tend to speak more and more about the extra danger of radioactive pollution. For that reason, a rescue boat was heading for Koriyama and was approaching to the coasts, but he turned around and headed for another place. My husband told me that in the case another explosion would occur, the situation would be too dangerous and we would have to leave our place. So we get ready a bag with food and clothes for 2 or 3 days, for the five member of the family: my husband, his parents, his aunt, and I. When I was preparing these bag, I was thinking about my own parents and brother. I told myself that if we had to fly and leave my family, I would regret it forever. I told me: “No, I could not act such as”. After hesitating, I made myself promise that I would stay in Koriyama, and that I would keep on living in that town.

4. Going out

Just after the earthquake, we received much information thanks to the mailing list of the community newspaper (Equal), which I am a member. It was depressing after watching the television news, but all these emails gave me some strength and I managed to feel better. I felt that if I decided to stay here, the best thing to do was to gradually stay positive. One day, when I was helping the staff of the organization *Koriyama Women’s Support Network* to put into order their things, I decided to act as much as I can, but not

attempting the impossible. That's how I began to volunteer for organizations that I know of. One day, I received an email from a member of the mailing list of *Koriyama Women's Support Network* which helps single mothers. She was giving me some details about the situation of women gathered in an evacuation place called *Big Palette*. Then, I decided to step out to attend a special meeting of this organization board. In the middle of April, we sent to Koriyama, Tomioka and Kawauchimura mayor a petition, asking them to set an only-women place in the evacuation center. By doing so, a member of *Koriyama Women's Support Network* managed to open a place reserved for women within the evacuation center. This place was named "Calm down Café", where women can talk together. Thanks to Fukushima Gender Equality Center, we managed to set this women-only environment. We all thought that it was important to give place to women's voices and experiences, especially if they are forced to extend their stay in the evacuation center. At that time, I was in a tricky situation because I should help my brother, so I stopped volunteering for a while.

Moreover, it was time for the community newspaper *Equal* to organize the plenary and conference for the 10 years anniversary of the newspaper, even if it was out of our mind because of the earthquake catastrophe. I got a planning ready and wrote the invitation letter for Chizuko UENO. However, we could not use all the equipments as planned, since many of them were broken. I had to change the plan. Then we wondered if we had to cancel the conference, but many staff of the newspaper asked: "But what if we don't organize it? Does that mean that the earthquake is stronger than our activity?" So we finally decided to organize the conference, and we get to find a suitable place for it.

At that time, for all the people of Koriyama, everybody thought that if a conference has to be planned, it would be about radioactivity problems, or to present some groups against the nuclear energy. We were in a situation so that we could only imagine that kind of topic for a conference, but when we implement the conference of *Equal* newspaper group, the hall was almost full. At the end of the conference, peoples' reactions were diverse, but we could feel a general atmosphere of tiredness, and I got some complex feeling. Two members of the administration board were absents because they took shelter in another prefecture, so we had to distribute their tasks and to work with few people. When the conference of *Equal* newspaper group took place, we closed the only women space in the *Big Palette* building, and instead of it we set a phone line for advice, a assistance unit for people living in temporary dwelling. I was thinking about getting involved again in the community groups, but my brother's disease was

getting worse, so I had to help him, to make for him some administrative procedure and for moving, so I had to stop again for a while my volunteering work.

5. Doing all one can

Without attempting the impossible, but saying that it is important to do all one can, from mid-term of 2011, I attend some conference or meetings which were about some topics like “Shirakawa and Minamata” or “nuclear shelter symposium”. From February 2012, I could attend with the group *For Independent Women* to a project which was supported by the government, and which was about giving advice and help for “women who suffer violence and feel anxious after the northern Japan great earthquake”. I am concerned. When attending to such meeting, by following some experts’ advice and practical training, I feel refreshed to learn on different topics. Since that on, volunteers of Koriyama and Fukushima began to increase partnership with volunteers of others prefectures; then I realized through my own experience that we were moving from a local Fukushima to a global FUKUSHIMA. For instance, I saw people on TV speaking about Fukushima: one person was surprised to see that all people in Koriyama did not wear a mask just after the earthquake. Another one said that she saw some people in Koriyama cultivating in their garden their own vegetables and giving them to the neighborhood. Someone also said that vegetables sold on supermarkets are all checked and only those who are not radioactive are sold. Every day, in the newspapers, radioactivity rate measures are given, but you can also find them on TV or radio. Some equipments for measuring radioactivity were set in public spaces and gardens, and everyone can read on them radioactivity exposure and absorbed dose. For Koriyama (a local Fukushima), it has become something normal, whereas for the other prefectures (a global Fukushima), it is still an outstanding situation.

In June 2012, I went through a new experience. In fact, when I attend to training for developing men and women equality, which was organized by the Community Center of Woman (an independent organization), I could speak face to face with Akiko DOMOTO, formerly head of the prefecture of Chiba and member of the coordination team with the Community Center of Woman. This was an exciting dialogue. I remembered that I was waiting in the lobby Mrs DOMOTO, to ask her directly some advice, and it went all right. This is something I never imagined I could do before. By doing so, I told myself that I began to do all I can.

6. To conclude

One week after the earthquake of March 11, 2011, I was struggling with an extremely hard period psychologically. But today, I reckon that if I overcame those obstacles, it is because I get involved in local action. Is this due to the fact that I already went on such a reflexive work within my volunteer work? I am involved in different organizations which are fighting against women discrimination, gender inequality, and sexual violence, and the path we have to walk through is a very rude one. However, I think that we can change our environment if we keep on involving that way. We get some results, even if they are small. This makes me happy and gives me strength. When looking back to what have changed into myself after the March 2011 earthquake, I realized that the following action are meaning a lot to me: to be able to enjoy every new day, to do volunteering work with the organizations I am involved in, and to act positively for this community work.

January 13th, 2013, Round table on research action, communication report

Profile of Mrs Aoyagi

Born and live in Koriyama, Fukushima prefecture

-community work involvement-

- Vice-chairwoman of the board of *Equal* citizen newspaper (non profit making organization)
- Member of the organization *For Independent Women* (today : non profit making organization, *Women' space Fukushima*)
- Member of the organization *Koriyama Women's Support Network*. This organization supports the women living in Koriyama and is aiming to be a one man place for gender issues.

Notes :

1. In Japanese, Global Fukushima is written in katakana, whereas local Fukushima is normally written, that is in kanjis.
2. Shirakawa is a town located about 50 kilometers south of Koriyama. Minamata Disease was discovered for the first time in the world at

Minamata City, Kumamoto Prefecture, Japan, in 1956. It is about the mercury poisoning (originally called Minamata disease) that took place there, because of the Chisso Corporation, which began to manufacture acetaldehyde in 1932.

Translated by Aline HENNINGER

Thinking about Fukushima Gender Equality Center practices

Fumie MIZUNO,
member of Fukushima Gender Equality Center

1. About the Fukushima Gender Equality Center

Opening: January 18th, 2001

Place: Fukushima prefecture

Administration: State-approved organization for Fukushima prefecture youth. Fund manager : Gender Equality Development Organization.

2. Activities of the Center after March 11, 2011

(1) Just after the earthquake

Fukushima Gender Equality Center, which located in Nihonmatsu, has suffered shakings with a seismic intensity of level 6. The Center did not endure any major damages and people in the building were safe. Nonetheless, since public transportation system was out of commission, people were not commute and were not able to know the situation at their own homes, and some even stayed overnight in the Center, on the day of the earthquake.

On March 12th, we were asked by the disaster recovery team of the Futaba hospital if they can relocate into the Center as an evacuation shelter. We did not know when they would arrive to the Center, but from our first understanding, these people were exposed to radiation. The officials have decided to ensure precautionary measures to be taken against radioactive pollution spread. The following day, a scanner was set up in the Center to trace radioactive contamination. For preparation of the preventive measures and tools, the Center was closed for approximately an hour, and then it was opened for 24/7 timeframe. Staffs were taking shifts to work long hours each day. At the same time, information and updates about the exposure of radiation were very inconclusive and vague, and, there were no precise and concrete information on the radiations properties like how we are used to, subsequently we were extremely anxious since we were unable to affirm if the Center is a safe place to be at, or not. Moreover, we had to work with constant uncertainties, and had to face with multifaceted that we were not familiar with, for example, food or gasoline supply disruption.

(2)From mid-April 2011 to now

Since April 12th, the Centre was working as usual, and the prefecture was about to state number of subsidies that would be allocated to us, but at the same time our activities were less and less controlled. We could not act as usual. The general context is where we have started implementing some trainings and lessons about “Disaster Recovery” or “How to help disaster-stricken people”, planning a psychological help unit (phone line or one-on-one encounter) and also providing a support unit for women with an only-women place.

a)The Center news bulletin « NEWS : Center future ».

The news bulletin « NEWS: Center future », became a very important way of communication of the Center, and was created to explain in a simple way to Fukushima’s citizens the main ideas concerning gender equality implementation. We have published it 4 times each year, it was approximately 12 pages each, and edited to 6000 copies.

In April 2011, when discussing about the news bulletin, we were speculating whether sufficient funding that the prefecture authorities would be allocated to us. In addition, the team was unsure on the publications and we examined ways we could publish articles in our unsettled situation. Finally, we have concluded that even with minimal funding received from the administration, it was necessary that the Center publish some information. Therefore, we have decided to keep on publishing the news bulletin, but differently – 3 times each year, edition of 6000 copies of about 4 pages.

b)What kind of information from Fukushima?

Until March 2011, the news bulletin was mainly about the activities of the Center: you can find in it articles on personal or group action oriented towards gender equality. When preparing the issues after March 2011, as a member of the editorial board, I contemplated the publication content and the genre of articles especially with such limitation to space column. We were extremely anxious about the consequences from the earthquake and the nuclear catastrophe that may impact our daily life. We believed that it was important to include the gender equality perspectives when reflecting the earthquake’s outcomes.

For instance, we started publishing articles that talk about the groups or organizations

that provide assistance for disaster recovery in the prefecture and about reconstruction activities and help units for disaster victims.

In 2012, as an organization that receives subsidies from central administration, we published news bulletins as the previous ones.

Moreover, for Fukushima, we did obtain some information from people whom received shelter from outside of the prefecture due to the radioactivity and vice versa, we sent our news bulletins to the Centers that located outside of prefecture to engage in understanding of gender equality. Then, we edited 8000 copies instead of 6000 copies and consolidate the article into around 8 pages.

People whom left Fukushima did not easily obtain information of their hometown prefecture. We understand their concern and anxiety for the lack of transparencies and information so we decided to write a special column named « Fukushima nowadays» with the goal to provide some relief.

Furthermore, many mothers have left with their children while the fathers stayed to work in Fukushima – we called them the “refugee mothers”. As a result, we felt the strong necessity to provide support to Fukushima women, especially refugee mothers, by starting activities to assist women living in fear and anxiety from family separation since they were sheltering elsewhere.

c) What I felt when collecting accounts of women involved in local communities for disaster recovery

Until now, I have gathered some accounts of women involved in local group or volunteering work. However, post the 2011 earthquake, when collecting accounts of female volunteers whom were also stricken by the disaster themselves, they inspire me wholeheartedly with their strength, resiliency, and nobility. With such inspirations and poignant feelings I encountered from them, I realized that these women had many common grounds. Among local organizations and community groups of Fukushima prefectures, some of them had already been interviewed by journalists. However, only a few interviews were women’s accounts, either filmed or recorded. Facing with a dilemma that I have reservations whether their true voices would be accurately expressed from the women perspective, and their statements were carefully transcribed. At that time, I felt how difficult it is to transcribe with carefulness and loyalty what these women truly believed, and I have considered publishing articles which would be

the closely resonate to their women voice.

(3) From now

In Fukushima, we are still bear the consequences of the great earthquake and nuclear accident, moreover, the growing frustration with the constant delays of the reconstruction. In reality, Fukushima is still not well-known until now.

For this present account, I might have touched someone who told himself “This is the first time that I heard some testimony of Fukushima inhabitant”, and I hope I could deliver some information on our particular situation in Fukushima, considering the special measures that are taken to protect from radioactive pollution.

As rebuilding Fukushima will take extensive duration and prolonged process, I believe it is very crucial to broadcast actual accounts of Fukushima inhabitants’ lives to other Japanese prefecture and internationally. I would like to continue questioning: what message to be delivered from Fukushima, and how we can communicate that message effectively.

January 13th, 2013, Round table on research action, communication report

Translated by Aline HENNINGER

<VERSION FRANCAISE>

1. Résumé de l'étude suivante :²

Recherche subventionnée par le Centre pour l'égalité entre les hommes et femmes de Fukushima

Titre de la recherche :

Création d'une communauté d'organiseurs et organisatrices locaux pour la reconstruction : le point de vue de la réalisation de l'égalité entre les hommes et femmes

Durée du projet :

Octobre 2012-Mars 2014

Unités de recherche :

NOM	UNIVERSITE	DOMAINE DE RECHERCHE
MURATA Akiko	Université de Waseda	Éducation communautaire pour adultes
NAKATA Sura	Université de Fukushima	Éducation communautaire et pour adultes
AMANO Kazuhiko	Université de Fukushima	Éducation communautaire et pour adultes
KOMIYA Hiromi	Université en médecine de Fukushima	Gynécologie
ARAI Hiroko (membre en 2012)	Université de Waseda	Éducation communautaire et pour adultes
YOSHIDA Kazuki (membre en 2013)	Université Chrétienne d'Ibaraki	Santé publique
YAUCHI Kotoe (assistante de recherche)	Université de Waséda	Études sur genre
AKISHIGE Tomoko (employée pour le projet)	Université de Waseda	

Objectifs de la recherche :

Le projet vise à développer un système institutionnel qui soutient la création d'une

² Ce rapport est féminisé dans la perspective de la réalisation de l'égalité entre les hommes et les femmes, cruciale dans cette recherche.

communauté de pratiques réflexive collective (Manabiau community³) d'organiseurs et organisatrices locaux dans une vision à long terme de la reconstruction locale nécessaire après les désastres de mars 2011 dans le département de Fukushima. Il s'agit de ceux et celles qui s'engagent, que ce soit à travers leur métier ou de façon bénévole, pour soutenir la reconstruction et pour le développement local. Ces personnes se confrontent à la nécessité de réorganiser une vie sociale, communautaire et quotidienne après l'accident de la centrale nucléaire de Fukushima, que ce soit à l'échelle individuelle ou publique. Il est donc indispensable de développer un système institutionnel de soutien des actions menées par ces acteurs et actrices locaux afin que les citoyen-ne-s du département de Fukushima prennent la parole dans le processus de reconstruction qui prendra encore beaucoup de temps. Ainsi, notre recherche se fonde sur les trois axes suivants :

1) Identification des limites et des forces dans la façon des organisateurs et organisatrices locaux de prendre des décisions professionnelles ou dans leurs manières spontanées d'agir et de communiquer.

2) Clarification du rôle du Centre pour l'égalité entre les hommes et les femmes du département de Fukushima en tant que plateforme qui offre des services dans l'optique de l'égalité entre les hommes et les femmes et pour la promotion de la diversité sociale.

3) Développement d'un système qui établit un partenariat entre des universités et des institutions afin de soutenir des organisations locales.

Contexte général :

D'après les études internationales menées sur le désastre et les rapports sociaux entre

³ C'est une communauté de pratique dans le milieu professionnel ou dans la communauté locale. Cette communauté s'appuie non seulement sur une pratique réflexive individuelle, mais collective. Il s'agit du partage des savoirs en action et dans le dialogue de personnes dans la pratique. L'éducation communautaire pour adultes au Japon a permis de créer au fur à mesure de ses pratiques et de ses recherches une telle communauté dans différentes communautés locales ; elle a organisé des réseaux à grande échelle afin d'établir l'autonomie locale qui contribue à la création d'un mieux-être de la société. Aujourd'hui, le développement d'une telle communauté et le réseau formé par ces communautés sont indispensables afin de construire une société de la connaissance, mais plus urgents encore dans la société japonaise après les catastrophes du mars 2011.

les hommes et les femmes, le désastre dévoile des inégalités toujours existantes entre les hommes et les femmes : par exemple, le nombre plus élevé des femmes victimes par rapport à celui des hommes victimes du désastre; l'accès inégal aux ressources pour la reconstruction ; la sous-représentation des femmes dans les instances de décision, à la fois pour le processus de reconstruction et au sein du système de gestion des désastres.

Au Japon, c'est la première fois depuis le séisme de Niigata en 2006 que le point de vue de l'égalité entre les hommes et les femmes a été inclus dans le processus de reconstruction et la gestion de désastres. Toutefois, le séisme en mars 2011 a mis au jour plus sérieusement la nécessité de ce regard. Dans le département de Fukushima notamment, les catastrophes causées par l'accident de la centrale nucléaire de Fukushima menacent plus largement et rendent plus complexe la situation de cette région. Les effets catastrophiques n'ont pas touché seulement au cœur de la vie, mais ont aussi retardé la réhabilitation des infrastructures et des bâtiments dans les villages évacués, provoqué la séparation des familles, et posé des questions de santé. En particulier, ces dernières pèsent sur les femmes qui sont angoissées vis-à-vis de leur grossesse, de l'accouchement et de la santé de leurs enfants. De plus, nous avons même constaté une discrimination à l'égard des femmes de Fukushima par ceux et celles qui craignent d'avoir un enfant malformé. Ainsi, nous pouvons dire que les problèmes soulevés à Fukushima sont liés à des enjeux des droits humains.

Afin de confronter la réalité de Fukushima et de résoudre ces problèmes, il est essentiel que les femmes autant que les hommes prennent la parole comme actrice et acteur actifs à partir d'une juste reconnaissance des situations et participent au processus de reconstruction.

Méthodologie :

La méthodologie consiste en une recherche-action participative qui s'inscrit dans le courant de la praxéologie qui insiste sur l'importance de la réflexivité. En dégagant des savoirs compris dans l'action et inventant des savoirs qui sont performants dans l'action, nous avons voulu voir ce que les praticien-ne-s pouvaient faire et nous voulons ainsi améliorer leurs actions. Également, nous tenons à développer une communauté de pratiques réflexives collectives en tenant compte du contexte particulier de Fukushima. Pour ce faire, notre recherche se compose de quatre pratiques réflexives collectives en collaboration avec des institutions telles que le Centre pour l'égalité entre les hommes et les femmes du département de Fukushima et le Centre pour l'égalité entre les

hommes et les femmes de la ville d'Iwaki.

- **Entretiens**

Des entretiens non directifs ont été réalisés avec des responsables du Centre pour l'égalité entre les hommes et les femmes du département de Fukushima et de ces institutions. Ils ont pour but de saisir des réalités par rapport au système éducatif pour les travailleurs et travailleuses de l'établissement.

- **Tables rondes**

Il s'agit d'une méthode de formation professionnelle. Cette formation se fait en groupe de cinq ou six personnes. Elle consiste à laisser à une personne la parole pour exprimer sa réflexion sur soi dans l'action. Ensuite, chaque participant-e raconte son expérience à son tour au sein du groupe. Les participants reviennent sur ces interventions afin d'explicitier les valeurs et le sens de leurs pratiques. Les tables rondes que nous avons organisées réunissaient des organisateurs et organisatrices locaux, des travailleurs et travailleuses dans le domaine de la santé publique, des administrateurs et administratrices publics, des infirmiers et infirmières, des enseignant-e-s, des praticiennes dans les associations pour les femmes, et des étudiant-e-s qui ont participé aux activités bénévoles pour soutenir la reconstruction, etc.

- **Écriture**

Après la table ronde, nous avons encouragé celle ou celui qui a pris la parole dans le groupe à écrire le compte rendu de sa communication et les réflexions qui se sont ensuivies. Nous avons joint comme exemple deux de ces écrits comme annexes au présent résumé.

- **Partage des écrits**

Les écrits ont été regroupés dans un recueil, qui a été distribué aux participant-e-s de la prochaine table ronde. Nous avons aussi organisé une rencontre autour de la lecture de ces écrits.

Apport de la recherche :

- **Mise en lumière des réalités des organisateurs et organisatrices locaux**
 - La réalité de ceux et celles qui s'engagent pour soutenir la reconstruction n'est pas reconnue.
 - « Après un an et demi, j'ai pu enfin raconter mon vécu dans cette table ronde » (un participant).
 - « Je n'ai jamais attendu l'aide pour les travailleurs et travailleuses dans les établissements publics, alors que j'en ai toujours senti la nécessité » (un participant).
 - La réalité des organisateurs et organisatrices locaux qui ont vécu une catastrophe et qui ont décidé de prendre des responsabilités nouvelles, que ce soit dans leur vie privée ou professionnelle.
 - Il est donc indispensable d'organiser un réseau qui fonctionne pour appuyer les organisateurs et organisatrices locaux.

- **Contributions apportées par la mise en place des tables rondes : des pratiques de l'écouter-raconter dans une relation interpersonnelle, de l'écriture, et du partage des écrits.**
 - Fournir l'occasion de mener une pensée réflexive pour les praticien-ne-s
 - Établir un lien entre les praticien-ne-s de différents domaines.
 - Créer un espace de rencontre entre les différentes générations ; développer un cycle de transmission intergénérationnelle.
 - Fonder une organisation qui crée des valeurs et des sens nouveaux.

- **Mise en évidence des caractéristiques des pensées essentielles afin de confronter des réalités pour les praticien-ne-s tourné-e-s vers les actions pour la reconstruction.**
 - Une pensée d'entraide pour vivre.
 - Une pensée vivace et durable afin de vivre ici et maintenant.
 - Une pensée qui se base sur les droits humains et qui ne tolère aucune discrimination faite envers les femmes.

- **Documentation et collection des documents des savoirs accumulés dans l'action pour la reconstruction**

Rôles attendus du Centre pour l'égalité entre les hommes et les femmes du département de Fukushima :

Le rôle primordial que nous attendons du Centre est d'être au cœur de l'élaboration des pensées pour éliminer et dépasser toute discrimination envers les femmes et les handicapé-e-s sous prétexte qu'ils soient touchés par la radioactivité.

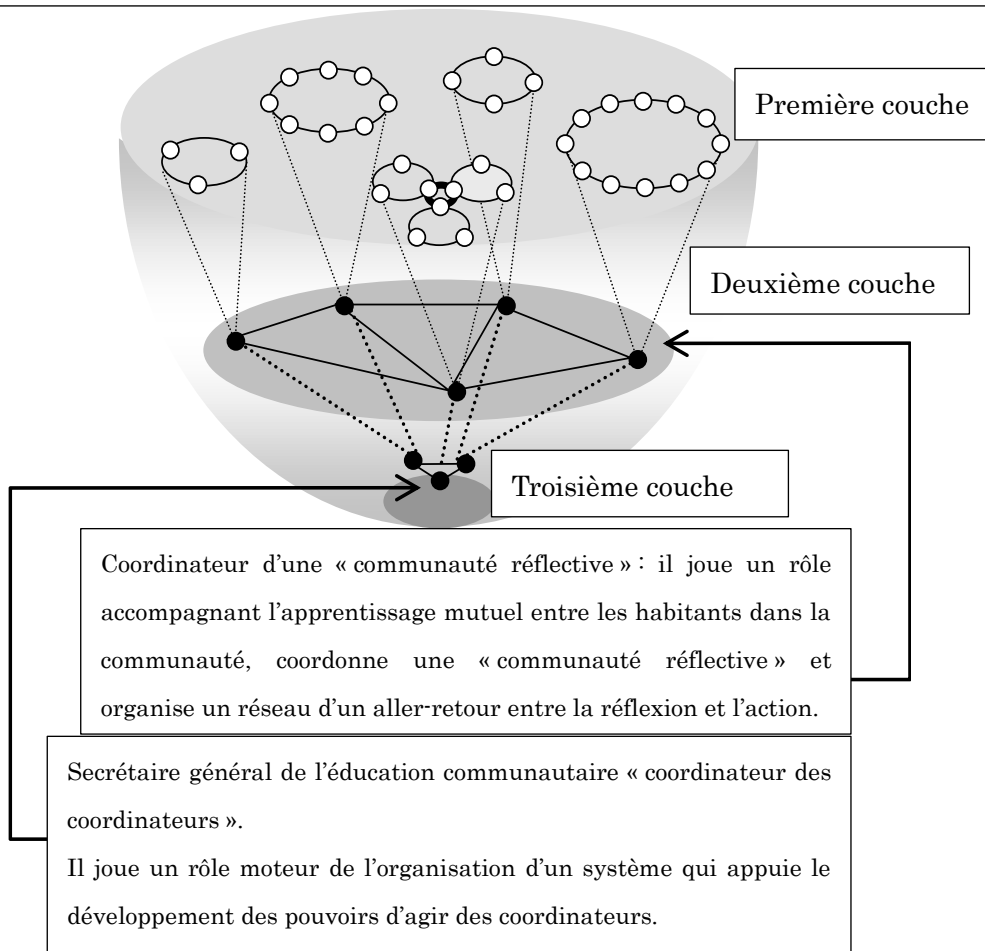
Également, nous avons constaté d'autres fonctions que le centre pourrait et devrait assurer :

- Le Centre pourrait jouer un rôle éducatif en tant qu'institution centrale de la politique de l'égalité entre les hommes et les femmes : fournir des formations destinées aux organisateurs et organisatrices locaux, et aux travailleurs et travailleuses dans l'administration publique du point de vue de la réalisation de l'égalité entre les hommes et les femmes et de la diversité sociale.
- Il pourrait organiser et développer des partenariats entre les institutions concernées par la politique de l'égalité entre les hommes et les femmes, des universités, et des organisateurs et organisatrices locaux.
- Il pourrait alimenter une éducation citoyenne qui promeut l'égalité entre les hommes et les femmes, et qui concerne les droits humains et la gestion des désastres.
- Il pourrait aménager un système de services de prévention du harcèlement et de consultation pour les victimes du harcèlement.

Conclusion :

Après avoir réalisé notre recherche composée de quatre pratiques, nous pouvons décrire une vision sur la relation entre la table ronde, le Centre pour l'égalité entre les hommes et les femmes et des institutions, selon le schéma suivant. (L'origine du schéma est présenté dans le *Développer une communauté de pratiques réflexive collective* paru en 2009 par la Société Japonaise d'Education Communautaire pour Adultes.

Schéma : un système qui appuie des communautés de pratiques réflexives par des réseaux



Première couche : activités dans la communauté ou dans le travail.

Deuxième couche : tables rondes en tant qu'espace où des praticien-ne-s de différentes générations dans divers domaines se rencontrent et exercent une réflexion sur l'action dans une vision à long terme.

Troisième couche : alliance entre le Centre pour l'égalité entre les hommes et les femmes de Fukushima, les universités, les institutions, et les coordinateurs des bénévoles.

Enfin, nous insistons sur l'importance de l'élaboration d'idées cohérentes qui concernent l'ensemble de ces couches :

- Faire disparaître la discrimination faite aux femmes et aux handicapé-e-s

- Réaliser une société où l'égalité entre les hommes et les femmes est effective
- Exploiter un nouvel horizon sur la vision de l'éducation : création d'une société réflexive consciente d'établir des relations interpersonnelles et fécondes.

Traduit par Kotoe YAUCHI

**De Fukushima à FUKUSHIMA : d'un Fukushima local à un
FUKUSHIMA global¹**
**Introspection pour comprendre l'évolution de les sentiments par
rapport au séisme et à l'accident nucléaire**

Mme Chiaki AOYAGI,
membre du journal citoyen *Equal* (organisation à but non lucratif)

1. Introduction

La superficie du département de Fukushima équivaut à celle de trois départements japonais, Toyama, Ishikawa et Fukui. De la même façon, en additionnant les populations de ces trois territoires, cela donne le nombre total d'habitants de Fukushima. Si l'on regarde la météo, on désigne de façon différente les trois zones qui forment Fukushima avec leurs noms locaux: Hamadôri, Nakadôri et Aizu. On marque ainsi des différences régionales, pas seulement pour le climat, mais aussi pour les structures économiques et également le tempérament des habitants de ces lieux.

J'habite dans la ville de Koriyama, située environ au centre du département de Fukushima, qui a une superficie plus ou moins équivalente aux 23 arrondissements de Tokyo (2188 km²). Dans le système administratif du département, la ville de Fukushima est considérée comme la sous-préfecture, mais c'est Koriyama que l'on désigne comme la ville commerciale. C'est ici que je travaille depuis 20 ans avec mon mari, dans notre studio de photographie. Je suis également impliquée depuis une dizaine d'années dans des associations locales.

2. Une semaine après le séisme du 11 mars 2011

11 mars 2011, 14h46. C'est une semaine après le séisme, alors que j'allais faire réviser ma voiture au garage, que j'ai réalisé en touchant le volant que ma voiture aussi avait subi un choc bizarre. En effet, le jour du 11 mars 2011, juste avant le séisme, je conduisais, et lorsque que j'ai vu le feu passer au rouge, j'ai ralenti, et la voiture s'est arrêté de suite. A ce moment là, je me suis dit « Ah ! un séisme ! ». Le poteau du feu, les poteaux électriques tremblaient beaucoup, des femmes en pleurs sont sorties du bâtiment à côté de moi, et le feu s'est éteint à ce moment. J'ai ouvert la vitre, et je n'ai pas bougé en attendant la fin des secousses. C'était long. Pendant ce temps, je réfléchissais à ce qu'il fallait que je fasse après que le tremblement de terre est passé : « Puisque tous les feux sont éteints, il faudra que je roule tout doucement, sans me

presser, pour arriver au studio de photographie et vérifier si tous les employés vont bien, et également inspecter l'état du bâtiment ». Pendant tout ce temps, mon cœur battait à tout rompre, comme s'il allait sortir de ma poitrine. En réfléchissant, j'essayais peut-être de garder mon calme. Quelques minutes après, j'ai conduit très lentement pour retourner au studio où il restait une personne, que j'ai vu sortir très vite dehors, elle était saine et sauve. Je n'arrivais pas à joindre mon mari et un autre employé qui étaient partis à Urabandai pour le travail. Ce n'est que le soir que j'ai enfin pu recevoir un sms de mon mari. Il disait qu'il allait sûrement devoir intervenir pour les secours. Il s'agissait de l'aide de la part des groupes de secours formés aux interventions après les séismes. Le sms est arrivé : cela voulait dire que mon mari et l'employé étaient sains et saufs, j'étais au moins soulagée pour ce point-là. En raison des détours pris à cause de la route endommagée, j'ai mis 4 heures pour rentrer chez moi, alors que d'habitude je parcours ce chemin en 1 heure. Je suis arrivée environ à 21 heures chez moi. Mon mari était là, il est sorti après s'être préparé pendant une heure, pour aider les secours. Une fois un peu calmée, j'ai regardé la télévision que je n'avais pas allumée depuis le séisme. Les images du tsunami me sont arrivées en pleine figure. La magnitude du séisme, l'ampleur de dégâts et la zone sinistrée : j'étais tellement étonnée. Je me rappelle alors que je me suis dit que notre vie allait être bouleversée après un tel événement. Trois ou quatre jours après cette soirée, je me rappelle également que je n'arrivais pas à trouver le sommeil, couchée toute habillée dans l'éventualité de s'enfuir de la maison. Le lendemain du séisme, je me rends dans la maison des parents de mon mari, je vérifie qu'ils vont bien, je leur dit que leur fils est parti pour aider les secours. Je vais ensuite chercher sa tante au centre public local, transformé en lieu d'évacuation, et je la dépose chez les parents de mon mari. Je vois que les supérettes ouvertes 24/24 et les supermarchés sont en train de se vider, alors je fais les courses et je décide de la façon de joindre mes proches si un autre accident survient. Dans la maison de mes beaux-parents, il y a heureusement des bouteilles de gaz propane, l'eau et l'électricité fonctionnent de nouveau. Comme il faisait froid à ce moment de l'année, je me faisais du souci pour les réserves de fioul, mais avec l'électricité on pouvait utiliser les radiateurs ou les tapis chauffants.

Ensuite je suis allée chez mes parents, pour vérifier s'ils allaient bien. De leur côté aussi, les principales installations fonctionnaient de nouveau, et comme ils s'inquiétaient pour les courses et les réserves de nourriture, je leur ai donné des boîtes de conserve. Mon grand-frère, veuf de sa femme depuis cinq ans, s'occupe de ses trois enfants, et habite avec nos parents. Son fils devait prendre des médicaments pour le cœur, et comme il

devait aller se déplacer jusqu'à l'hôpital de Fukushima une fois par mois pour renouveler son traitement, il se faisait du souci pour faire les pleins d'essence.

3. Le désastre suivant

Le 11 mars, on ne se préoccupait que du séisme. Cependant, on apprend juste après aux informations qu'il y a de la pollution radioactive. « Il n'y a pas de danger immédiat » proclame la télévision : est-ce qu'on peut y croire ? Trois jours après le séisme, j'étais extrêmement tendue, et j'essayais d'estimer tout ce qui était nécessaire de faire dans une telle situation. Des secousses secondaires se produisaient très souvent, et l'on entendait le bruit des hélicoptères de secours dans l'après-midi. Dans le mois qui a suivi le séisme, la police, les pompiers et les hélicoptères de secours n'ont cessé de travailler, d'aller et venir sans cesse. On m'informe que l'eau est contaminée par les particules radioactives. « Boire de l'eau devient dangereux, il ne faut plus boire l'eau du robinet ! » : c'est un mail que je reçois d'un ami. Il était trop tard quand j'ai voulu acheter de l'eau en bouteilles, on n'en vendait plus. J'ai alors acheté de l'eau et du thé dans des petites bouteilles que l'on trouve dans les distributeurs automatiques. « La période de vie des particules radioactives est de 7 jours ». En accumulant de l'eau dans un grand nombre de casseroles, je peux m'en servir après avoir attendu quatre jours. Je me dis que ça ira et que je ne risque pas grand-chose une fois que la moitié de la période est passée. Quatre jours après le séisme, un soir, mon mari rentre à la maison. Il y a de sérieux dommages à cause du tsunami, et l'on mène les recherches des blessés ou disparus alors même que les secousses continuent, ce qui est dangereux. Il a pu obtenir des informations alors qu'il aidait les pompiers pour les secours aux sinistrés : on parle davantage du danger supplémentaire que constitue la pollution radioactive. Pour cette raison, lui et son équipe qui devaient au départ venir vers Koriyama et qui se rapprochaient de la côte a fait demi-tour, se sont dirigés vers un autre endroit. Mon mari m'a alors dit que si une autre explosion se produisait, la situation deviendrait trop dangereuse et qu'il fallait se préparer à évacuer dans ce cas. Nous avons ainsi préparé dans un sac des vêtements et de la nourriture pour tenir 2 ou 3 jours, pour les cinq membres de la famille : mon mari, ses parents, sa tante, et moi-même. Pendant que je faisais de tels préparatifs, je pensais à mes propres parents et à mon frère. Je me disais que s'il fallait s'enfuir, et que je devais laisser ma famille, je le regretterai toute ma vie. Je me suis dit « Non, je n'y arriverai pas. » Après avoir longtemps hésité, j'ai pris une résolution. Je me suis dit à ce moment que je resterai à Koriyama, et que je continuerai à vivre à cet endroit.

4. Se déplacer

Juste après le tremblement de terre, la mailing liste de l'association où j'étais (le journal citoyen *Equal*) fonctionnait très activement. Quand j'étais déprimée après avoir regardé les informations, tous ces mails reçus me redonnaient du courage, et j'arrivais à être de bonne humeur. J'ai eu l'impression que si je décidais de continuer à vivre ici, j'avais tout intérêt à adopter un comportement positif, en restant optimiste à chaque moment. A l'occasion d'une journée où j'aidais des membres de l'association *Réseau d'entraide des femmes de Koriyama* à faire le tri dans leurs affaires, j'ai décidé d'agir dans la mesure de ce que je pouvais, et de ne pas faire l'impossible. C'est alors que j'ai commencé à sortir dehors pour mes activités de bénévole. J'ai reçu un message de la part d'une membre de la mailing liste de *Réseau d'entraide des femmes de Koriyama*, c'était quelqu'un qui aide les mères célibataires dans leur quotidien. Elle donnait des informations sur la situation des femmes rassemblées dans un vaste lieu d'évacuation, dans le bâtiment nommé *Big Palette*. C'est alors que je me suis décidé à sortir de chez moi pour assister à une réunion extraordinaire tenue par les membres de cette association. Au milieu d'avril, nous avons adressé une pétition à la ville de Koriyama, Tomioka et Kawauchimura, afin que l'on puisse installer un endroit réservé aux femmes dans le centre d'évacuation. Ainsi, une membre de l'association *Réseau d'entraide des femmes de Koriyama* a fait ouvrir un endroit baptisé pour l'occasion « Café –repos », lieu réservé aux femmes, où elles peuvent s'entretenir entre elles. C'est grâce à la participation du Centre pour l'égalité entre les hommes et les femmes de Fukushima que l'on a pu édifier cette zone réservée aux femmes. En prévision d'un séjour prolongé dans le centre d'évacuation, on a pensé qu'il était important de recueillir les expériences et les voix des femmes. Moi à ce moment, j'étais dans une situation où je devais aider mon frère, et je me suis arrêtée provisoirement dans mes activités bénévoles.

En outre, c'était le moment où il fallait préparer la réunion plénière et la conférence pour les 10 ans du journal citoyen *Equal*, qui étaient passés à la trappe avec le séisme. J'ai préparé un planning et l'invitation pour Chizuko UENO. Cependant, comme la plupart des installations publique étaient endommagées et que l'on ne pouvait plus s'en servir, je ne pouvais pas établir le planning comme prévu. La question d'annuler la conférence s'est alors posée, mais plusieurs membres du journal ont alors demandé : « Mais si on ne donne pas de conférence, que fait-on alors ? Cela veut dire que les dégâts du séisme ont eu raison de notre activité ? ». Nous avons quand même décidé d'organiser la conférence, et on s'est débrouillé pour trouver un endroit convenable.

A ce moment, dans la ville, tout le monde pensait que s'il y avait une conférence, elle serait à propos des problèmes relatifs à la radioactivité ou bien pour présenter des groupes anti-nucléaires. On se trouvait dans une situation où l'on ne pouvait imaginer que ce genre de sujet pour une conférence publique, mais quand on a fait celle du journal citoyen *Equal* on s'est retrouvé avec la salle presque pleine. A la fin, il y a eu diverses réactions, mais on ressentait aussi une impression générale de fatigue, je ressentais quelque chose de complexe. Deux membres du conseil d'administration n'étais pas présents car ils s'étaient réfugiés dans un autre département, et on avait du organiser tout avec peu de gens, en ayant du mal à se répartir leur travail. Il y a eu cette conférence pour le journal citoyen *Equal*, et au même moment, on a fermé l'espace réservé aux femmes dans le bâtiment *Big Palette*, et on a alors mis en place une ligne téléphonique de conseil, et une cellule de soutien pour les personnes vivant dans des logements provisoires. Je me suis alors dis que j'allais me remettre à agir de façon bénévole, mais la maladie de mon frère a empiré, et j'ai du le soutenir pour faire des démarches administratives et pour un déménagement, et dans cette situation, j'ai dû arrêter mes activités bénévoles de nouveau.

5. Agir dans la mesure de mon possible

Sans faire l'impossible mais tout en me disant qu'il était important de faire tout ce qui était en mon pouvoir, à partir du milieu de l'année 2011, j'ai pris sur mon temps pour participer à des réunions portant sur des sujets comme « Shirakawa et Minamata² » ou bien « Symposium à propos des abris anti-nucléaires ». A partir de février 2012, j'ai pu participer avec l'association *Pour l'indépendance des femmes* à un projet soutenu par le gouvernement, qui consistait à mettre en place un « conseil pour les femmes qui subissent des violences et qui vivent dans l'angoisse à cause des conséquences du grand tremblement de terre du Tohoku ». Je me sentais concernée. En participant à de telles réunions, et grâce aux directives de spécialistes et des stages de formation, je me suis sentie de nouveau partante pour apprendre sur de nouveaux sujets. A partir de ce moment-là, les occasions pour les bénévoles de Koriyama et Fukushima de nouer des liens avec d'autres départements se sont multipliées, et que je suis rendue compte à travers mon expérience que l'on passait d'un Fukushima local à un FUKUSHIMA global. Par exemple, j'ai vu une personne à la télévision affirmer que juste après le séisme, elle avait été très surprise de voir que les gens à Koriyama ne portaient pas tous des masques. Ou encore une personne qui affirme avoir vu des personnes cultiver à dessein des légumes dans son potager et les apporter à ses proches. Ou encore quelqu'un qui affirme que les légumes des supermarchés ont été vérifiés et que leur taux

de radioactivité a été mesuré, et que seuls ceux qui sont conformes aux normes se retrouvent vendus sur les étals. Chaque jour, dans les journaux, les mesures des taux de radioactivité sont données, mais on les retrouve également à la télévision ou à la radio. Des appareils de mesure de la radioactivité ont été installés dans les lieux publics et dans les parcs, et on peut y lire les taux des différentes particules radioactives. Pour Koriyama (un Fukushima local), c'est devenu quelque chose de normal, alors que pour les autres départements (un Fukushima global), c'est une situation hors du commun.

En juin de la même année, je suis passée par une nouvelle expérience. En effet, quand j'ai participé à un stage pour la promotion de l'égalité hommes-femmes, organisé par le Centre de formation continue pour les femmes (organisme indépendant), j'ai pu parler directement à Akiko DOMOTO, ancienne préfet de Chiba et membre de la commission de concertation en contact avec le Centre de formation continue pour les femmes. Cet échange a été très stimulant. Je me rappelle avoir attendu Mme DOMOTO dans le couloir après la conférence pour lui demander directement conseil, et cela a marché. C'est quelque chose que je n'aurai jamais imaginé pouvoir faire auparavant. C'est ainsi que je me suis dis que j'avais commencé à agir dans la mesure de mon possible.

6. Pour conclure

Une semaine après le séisme du 11 mars 2011, j'ai traversé une période extrêmement difficile d'un point de vue humain, mais aujourd'hui, j'estime que si j'ai surmonté cette épreuve, c'est parce que je me suis engagée. Est-ce que c'est parce que j'avais déjà expérimenté un tel cycle action-réflexion au sein de mes engagements bénévoles ? Je suis engagée dans des associations contre la discrimination envers les femmes, contre les problèmes d'inégalités des genres et contre les violences sexuelles, et la lutte que nous menons est rude. Toutefois, je pense que l'on peut changer notre situation si on continue de s'impliquer ainsi. On obtient des résultats, même petits. C'est quelque chose qui me rend heureuse et qui me donne de la force. En regardant ce qui a changé en moi après le séisme du 11 mars 2011, j'ai remarqué que plusieurs choses m'apportent énormément : faire attention à chaque nouvelle journée, faire partie du mouvement des associations dans lesquelles je suis, mener de façon positive ces activités bénévoles.

13 janvier 2013, Table ronde sur les recherches actions, retranscription de l'exposé.

Profil de Mme Aoyagi

Naît et réside dans la ville de Koriyama, département de Fukushima
-vie associative-

- Vice-présidente du conseil du journal citoyen *Equal* (organisation à but non lucratif)
- Membre de l'association *Pour l'indépendance des femmes* (aujourd'hui : organisation à but non lucratif, *Women' space Fukushima*)
- Membre de l'association *Réseau d'entraide des femmes de Koriyama*. Cette association soutient les femmes habitant à Koriyama et souhaite constituer un guichet unique pour les soutiens aux femmes

Notes :

3. Le Fukushima global est écrit de katakana, tandis que le Fukushima local est écrit normalement, en kanjis.
4. Shirakawa est une ville située à environ 50 kilomètres au sud de Koriyama. Minamata est la baie qui a connu la catastrophe sanitaire suivante : de 1932 à 1966, une usine pétrochimique de la compagnie Shin Nippon Chisso rejeta des métaux lourds, en particulier du mercure.

Traduit par Aline HENNINGER

Réflexions sur les pratiques du Centre pour l'égalité entre les hommes et les femmes de Fukushima

Fumie MIZUNO

membre du Centre pour l'égalité entre les hommes et les femmes de Fukushima

1. A propos du Centre

Ouverture : le 18 janvier 2001

Lieu : département de Fukushima

Administration et statut : Fondation d'utilité publique pour la jeunesse, du département de Fukushima. Gestionnaire désigné : Organisation pour la promotion de l'égalité hommes-femmes.

2. L'engagement du centre après le séisme du 11 mars 2011

(1) Juste après le séisme

La ville de Nihonmatsu, où se situe le Centre pour l'égalité entre les hommes et les femmes de Fukushima, a supporté des secousses de force 6. Le Centre n'a pas vraiment été endommagé, et les personnes qui étaient à l'intérieur étaient saines et sauvées. Mais comme les moyens de transport ne fonctionnaient plus, ces personnes ne pouvaient pas savoir si leurs domiciles étaient endommagés ou non, et plusieurs sont restés dormir dans les locaux du Centre le soir même du séisme.

Le 12 mars, nous avons reçu une demande de la part d'une division au sein de l'hôpital de Futaba, qui s'occupait de la gestion des sinistres. Ces personnes ont demandé à venir se réfugier dans notre Centre. Nous ne pouvions pas savoir à quelle heure ils arriveraient, mais nous avons sur que ces personnes avaient été irradiées. Il a ainsi été décidé de prendre des mesures contre la pollution radioactive. Le lendemain, un scanner-écran avait été installé dans le Centre, afin de mesurer la contamination radioactive. Pour installer ces appareils, le Centre avait fermé ses portes une heure, puis on l'avait laissé ouvert 24/24h, et les employés se relayaient dans la journée. Parallèlement, les informations que l'on recevait étaient vagues, et, contrairement à aujourd'hui, on ne connaissait pas en détails les propriétés des radiations, et on était extrêmement embarrassés de ne pas pouvoir affirmer si le Centre était un endroit sûr ou non. En outre, nous avons du travailler en ressassant nos incertitudes, et nous étions

confrontés à des problèmes que nous n'avions jamais rencontrés, comme la rupture d'approvisionnement des denrées alimentaires ou de l'essence.

(2) D'avril 2011 à nos jours

A partir du 12 avril, le Centre fonctionnait normalement, et le département devait revoir les subventions qu'il nous allouait, alors même que le contrôle effectif sur nos activités diminuait. Nous n'avons donc pas pu agir comme d'habitude. C'est dans un tel contexte que nous avons mis en place des cours qui avaient pour sujet « Gestions des sinistres » ou encore « Porter secours aux victimes de la catastrophe », que nous avons installé une cellule de soutien psychologique (que ce soit par téléphone ou entretien face à face), ainsi qu'un groupe de soutien pour les femmes avec un espace qui leur était réservé.

a) La publication du bulletin d'information « NEWS : l'avenir de nos bâtiments ».

Le bulletin d'information « NEWS : l'avenir de nos bâtiments », devenu un moyen d'information très important pour le Centre, a été conçu dans le but d'expliquer de façon simple aux citoyens du département les idées propres à la réalisation de l'égalité hommes-femmes. Il est publié 4 fois par an, fait environ 12 pages, et le tirage se fait à 6000 exemplaires.

En avril 2011, à propos de ce bulletin d'information, quand il était question de l'enveloppe budgétaire que le département nous allouait, nous nous demandions s'il fallait ou non publier, et nous avons aussi examiné de quelle façon il faudrait procéder dans le cas où l'on décidait de publier. Nous avons jugé en conclusion que même si on n'obtenait pas grand-chose du département, il était nécessaire que le Centre publie et diffuse des informations. C'est ainsi qu'on a décidé de continuer la publication, mais sur un format différent : un tirage 3 fois par an de 6000 exemplaires d'environ 4 pages.

b) Quelles informations depuis Fukushima ?

Jusqu'à mars 2011, les principales informations du bulletin concernaient les activités du Centre : on y trouvait des articles sur des actions personnelles ou collectives menées en faveur de l'égalité hommes-femmes. Lors de la préparation des numéros d'après mars 2011, en tant que membre du comité éditorial, j'ai réfléchi à ce qu'on pouvait publier, et quels pourraient être les contenus dans l'espace limité de nos colonnes. Alors que nous éprouvions tous une grande anxiété vis-à-vis de l'impact du tremblement de terre et de

l'accident nucléaire sur nos activités, nous avons pensé à inclure le point de vue de l'égalité entre les hommes et les femmes dans la situation actuelle du sinistre.

De façon concrète, nous avons commencé à publier des articles qui présentaient des associations qui avaient participé dans le département à des actions de soutien des victimes du tremblement de terre, ou encore des informations relatives aux activités de reconstruction et de soutien aux sinistrés.

En 2012, en tant qu'association subventionnée par le département, nous avons publié des bulletins qui ressemblaient à ceux des années précédentes.

En outre, pour Fukushima, comme il y avait beaucoup de gens qui avaient fui le département à cause de la radioactivité, nous recevions des informations de leur part, et nous avons à l'inverse envoyé des exemplaires de notre bulletin à des centres engagés en faveur de la promotion de l'égalité hommes-femmes, situés en dehors du département de Fukushima. Nous sommes ainsi passés d'un tirage de 6000 à 8000 exemplaires, tout en réduisant le nombre de pages à 8.

Les gens qui avaient fui à l'extérieur de Fukushima avaient du mal à obtenir des informations concernant leur département. Nous avons bien ressenti leur inquiétude par rapport à ce point, et nous avons décidé d'écrire une rubrique intitulée « Point sur la situation actuelle à Fukushima ».

En particulier, il y avait beaucoup de mères parties avec leurs enfants, tandis que les pères restaient travailler dans le département de Fukushima : ce sont celles qu'on appelle les « mères réfugiées ». C'est dans cette optique que nous avons choisi de mettre en place des activités de soutien aux femmes de Fukushima, pour soutenir ces femmes qui vivaient dans l'angoisse, souvent séparées de leur famille car parties se mettre à l'abri ailleurs.

- c) Ce que j'ai ressenti en recueillant les témoignages des femmes impliquées dans des activités de soutien

Jusqu'à présent, j'avais recueilli divers témoignages de femmes bénévoles et engagées dans des groupes locaux. Mais après le séisme de 2011, quand je me suis mise à recueillir ceux des femmes engagées alors qu'elles mêmes étaient considérées comme

sinistrées, je recevais droit au cœur leur courage chaque fois que je les voyais au sein de leurs activités. Je me suis alors rendue compte que ces femmes avaient plusieurs points en commun. Parmi les associations et les groupes bénévoles du département de Fukushima, certains avaient plus ou moins expérimenté des prises de contacts avec des journalistes, pour des entretiens. Cependant, il y avait très peu de témoignages (écrits ou oraux) de femmes. Je suis alors tombé dans un dilemme où je n'étais pas sûre que les voix de ces femmes soient réellement exprimées ; que leurs témoignages soient retranscrits avec loyauté.

C'est à ce moment là que j'ai ressenti le fait qu'il est difficile de transcrire avec soin et fidélité ce que pensaient ces femmes, et j'ai prise en considération le fait de publier dans la mesure du possible des articles qui se rapprochent au plus près de ce voix féminines.

(3) A l'avenir

A Fukushima, on ressent encore aujourd'hui les conséquences du grand tremblement de terre et de l'accident nucléaire, et on se retrouve dans une situation où la reconstruction tarde encore et toujours. Cette réalité de notre département est très mal connue.

Pour le présent compte-rendu, j'ai peut-être touché des gens qui se sont dit « C'est la première fois que j'entends les témoignages des habitants de Fukushima » ; et j'ai pu informer de la situation particulière du département, eu égard aux mesures à prendre face à l'accident nucléaire.

Puisque la reconstruction de Fukushima va prendre beaucoup de temps, probablement des dizaines d'années, je pense qu'il est très important de faire connaître les témoignages actuels des habitants de Fukushima aux autres départements japonais ou encore à l'étranger. Je souhaite poursuivre cette réflexion, à savoir : quels messages délivrer depuis Fukushima, et comment les transmettre ?

13 janvier 2013, Table ronde sur les recherches actions, retranscription de l'exposé.

Traduit par Aline HENNINGER

研究事業メンバー

村田晶子（早稲田大学）

中田スウラ（福島大学）

天野和彦（福島大学）

小宮ひろみ（福島県立医科大学）

新井浩子（早稲田大学・2012年度）

吉田和樹（茨城キリスト教大学・2013年度）

矢内琴江（早稲田大学、リサーチ・アシスタント、翻訳）

秋重知子（早稲田大学、研究補助者）

アリーヌ・エニンジェ（INALCO、早稲田大学交換研究員、翻訳）

平成 24・25 年度 福島県男女共生センター公募型研究

「復興に向けた地域コーディネーターのコミュニティづくり—男女共同参画社会
実現の視点から」報告書 概要版

発行年月日：平成 26 年 3 月

編集・発行：「復興に向けた地域コーディネーターのコミュニティづくり—
男女共同参画社会実現の視点から」研究代表者 村田晶子

連絡先：東京都新宿区戸山 1-24-1